

ヤマ（平地林）といっても2種類ある



日本の森林の保全管理や研究をしてきた谷本丈夫さんと市内で平地林などをフィールドに緑の保全活動に取り組む吉田春彦さんにヤマ（平地林）の歴史的な背景や取り巻く現状について語っていただきました。

昭和30年代まで日本の森林の多くは、農用林でした。当時、農業を営む際には、例えば1haの畑につき、肥料や燃料を採るために10haから15haの広さの山林が必要でした。1回木を切ったらまた育つのに数十年かかるため、山林だけでなく、平地林も農用林として使っていました。

昔は山掃除や落ち葉かきといって山かごの中に落ち葉を入れて小屋に持っていき積んでおきました。落ち葉は堆肥や燃料として使用する大事なもので11月には地面が見えるほどかき取ってしまい、まったく残っていませんでした。林にあるものはすべて使っていたのです。

今の平地林は、農用林だったものですが、大きく分けて2種類あります。ひとつは、クヌギやコナラなど一種類の揃った薪を生産する目的で営林として植樹した林。もうひとつは、樹木の種類がたくさんあり古来より里山として使われてきた入会山※であったところが放置され、大きくなった林です。これらは同じ平地林でも全く質が違うものなのです。

ちなみに烏ヶ森公園や祇園原の松林は、皇室財産である御料林（ごりょうりん）であり、その後公有地となりました。

営林として薪を生産するための林

今はガスなどを燃料として使用していますが、昔はすべての燃料に薪炭を使用していました。クヌギやコナラが生えており、まれにハンノキや柳も出てきます。また、松の木も燃料にするために植えられていました。アカマツはとても高温で燃えて灰が残りづらいため陶芸向きであり益子焼などでも使用されています。宮沢賢治の「税務署長の冒険」に出てくるテレピン油も松からつくられたものです。

昔は、木を植えるのは燃料など、全部使う目的があったからなのです。例：烏ヶ森公園・祇園原の松林など

里山として使われていた林（入会山）

昔は、村ごとに入会山を管理していました。※入会山（いりあいやま）とは、一定地域の住民の団体（村落）が、生産・生活に必要な薪炭や用材、肥料になる落ち葉などを採取する目的で共同管理する山林のことです。

里山のように自然に樹木が生えてきたところは色々な種類が生えている林になります。昔の里山は低木が多く、人の手で管理されていたこともあって明るい林でした。例：南河内第二中学校西側の林



吉田春彦さん：
木を知ろう・森を知ろう会代表



昔は、木は大切な資源で無駄にせず全部使っていたんだ。木材や落ち葉、山菜を採るために人の手によって管理されていた林は、樹木が大きくなりすぎて朽ちたり虫がついて病気になることもなく、うまく循環利用できていたんだね。



谷本丈夫さん：
宇都宮大学名誉教授



つながッテルね！ 条例10条

（協働）

第10条 市民、議会及び市は、まちづくりを推進するために、それぞれの立場を理解し、目的を共有し、相互に依存することなく力を合わせて、その実現に努めるものとする。